

大閣秀吉公實傳 全

289

卜2

39



舉秀士曰公實傳換叙

豐太閤音著朝服下闕下施樂院感激數拜 天顏乃

謂人曰身起布衣位極人臣 天恩深矣蓋余也昔

當 朝求大徵之時事後宮奉一賤役一日不圖奉迎

龍體而有身乃出嫁屏人而生余也按豐太閤我

邦古今無雙公家雄故其行事礎之落之如日月皎

然也如托言豐之事自編貴種者豐公豈有事

世傳豐太閤嘗曰吾母夢日輸入懷而生余者蓋



A289
12
39

大將と一兩王子を捕外圍ふ威
 名をあがり智仁勇義徳の将二代
 の戦功あけくかゝりて忠義没る
 此とく実豊茂家の柱石没後
 柁と承りて名を万天とあけ奉る
 後代に始もて蜀の五虎おこし
 羽小枋柁とす
 福馬左衛門大夫正則
 尾州清洲捕屋おれたまが子市松
 と稱せ七景の尉より秀吉小佐任
 行中をさし随ひ軍学妙法

清洲會戦の事



をまび出藍の才けり取も小戦功を
 存し播磨越見川の戦小大膽不敵
 の術をとり敵味方の目をあくらじ
 山崎天王山の取合小使番よりあり
 御方松田太郎左衛門尉可
 見才をいけりて且下と句
 賤ヶ嶽の戦ひよ七本槍の其一個
 之長股脇の長楯威槍もかく
 死長坂槍小魏曹操の百万の兵
 左白眼久き熱人張飛のこゝ



片相東市心且元

賤ヶ敷七本鎗の共人始助作共

先清和源氏ゆつて足徳の國主土

波頼藝分流きありしや齋老が為

は氏族とてくく滅亡し老當願よ

して父おちこも母いづれ泣く山

林ふ忍び居り年を捨て秀吉

初服互謀のそだ召女され太閤は

一代先し進み後ふちかひ軍ゆ比

敷きしは他界の後幼君を捕佐

まその孤忠苦心備まるとや蜀の

五虎の大お常山北趙雲觀の百万

の勢おより阿斗を救ひなせし

右膳よまひし

脇坂中務大浦安治

その先は井さかの旗下れ得たり

長政やつびく俊秀者し仕(武

勇經倫ゆつて波きおを討ち鎗

の皮を傳わり法世に名をそわ

やうし賤ヶ敷七本鎗の一個よく

老てふまはく盛ち蜀の老将

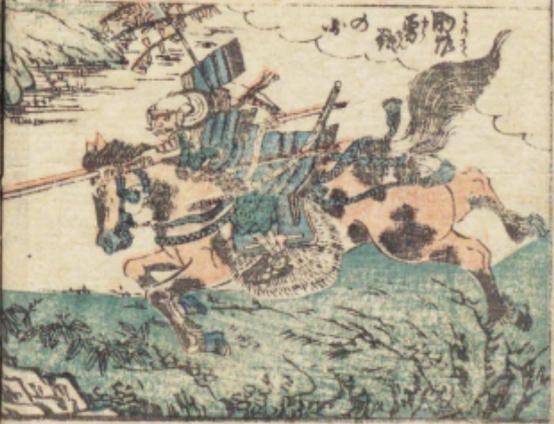
軍黃忠の旗人



福助



如藤左馬今嘉明
 越前左幼名孫は力量煙をき
 衆ふ如豊臣兼方の世ありて七
 本鎗のや一個舟所は我我る
 名を承り孫の母は隆と名なり
 飯を抜く一世の功績蜀のみ虎
 將軍馬起よはて
 平野遠江守は本
 勇極俊如古今は絶も物中
 ケ嶽の働人を目をまららし
 その後未とてまるとり耐七本



餘の流くを今をよ海盛のを
 清心長景は向ひ共方小様やう
 みより我亦方へあられよ一万
 是なりべー其方一人なりとも
 一降用もかゆ中とりの長かおよ
 後ふ今釈一退かの時書院の
 持側りり小便そまがら活心く
 今方へあくるは家又回復られハ
 かきくのりハ物するまどと打笑
 ひくろその思誠ふ柳安まべー
 是を蜀の李嚴よはて



播磨内膳正武則

助を要つもと別正小三郎長治が
旗下秀吉よ仕へ諸方へ軍をおか
せしむる隨つてしつてしつてしつて
一敵七本槍の一個勇戦人の耳
頭をおろしつてこれを張包し置

如藤遠江守光泰

作内法持勢の中興戦の功老る
平征伐の時ハ二本丸無程の及を
しつて城兵これ小力踏て亡ぶ朝

舞の役小敷なま名をあらし其

外戦子母小必搭きしつて蜀の

尾藤左衛門佐左定

始助十郎武勇亮も迅雷の聞り

攪攪十七万石をあらし后法令

を背くふよつて領知を没収し

罪せしめん事を恐ま相州へ走

る小條賊臣のそん邊せしつて蜀の
邊寇お軍王平よ七



平助の旗



堀左衛門督秀政

江右邊の丹波傳之始藤田の終

下二属と信長没後秀吉は任

劉秀騎果万人 猪き山一

戦の時八坂尾吉旺しん小天王

山をとり小田原陣の時功をたけ

上信救度の戦場小高名とウ

さうに攻守ふんを権きつひと我

前北の左九万石久一威海ふ

ふうふ丸車騎持軍張翼ふ

はさや

小市根津守行長

堀の町人小西如清が勇除十郎佐

茶園小信一浮田本をたて直家其

子八郎を秀吉へ人質よまのり付

み添し付をひき其り其侍秀吉小

仕ふ智を更深く屢武功あり電通

あつ 即ちすまを初朝辭

征伐のしゑハ流心とくの小先鋒の

大将として豆蔵と一歩ふおやな

勇威を衣ふ大商没後石田三成

と共謀叛を企謀教せし蜀の



猛將魏延 搦手

堀尾帯刀生るるを斬

尾羽の士屋庵たり老るる子孫

秀長稲多山の同きを如くも

手首を打ち小杉合戦主従

の約をうく路業内と石山合戦

小杉寺の謀士鈴木重幸八陣

を布おぼし軍を圍むられを破

て美若を救ふ山崎の明智軍

將を討く天王山とて勝つ敵の

戦小杉やう氏家初彦とて小

信雄の大軍を大垣より入秀吉

の戦を十分よあさむ老年および

遠州濱松よりわくか賀丹跡八を

討えまを一代の清勇敢て敵を

蜀の衆中將軍孫乾とてあふ

竹中半兵衛重直

濃兵缺る家の旗下の謀士松久

分不道とて身と山林の退隠

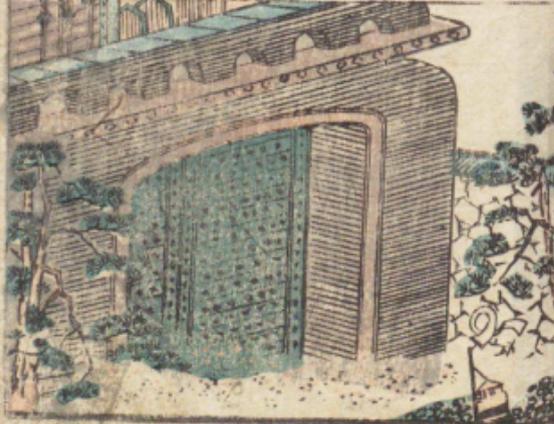
は鐵田信長その軍術小杉

智謀双ぶ老るるを木下若君

命の命とて是を親客むとて

小西行长 朝鮮の王城

一宮の



高論は仗一出く秀吉を助げ
 得難し。物ふのいふは事と示に
 三國の時徐庶身退くゆのそと
 孔明歴統の二人をま儀まする

谷大膳

重双の勇士大力の姿な。あち中
 松平徳列三木攻平田をとり
 居々々或夜中國軍勢を糧
 を送らんと相圖の糧綱をわげ兩
 家の軍勢を不攻立つ大搦也

強が士卒を制し汝を強動さ
 ぞ我切く切く敵を防ぐべ
 其強ふ防禦の術を堅固にせし
 とは拾俵廿四人の甲兵を門具
 中國勢のまかへ面とあひ切り入
 考考若を撰らる前後左右へ突伏
 恰も猛虎の姿を半井中へ入らる
 まつて内小三甲子務をとり切
 倒せし大勢をまじり取り
 也あの勇兵こそ谷大膳あるぞ
 討ててまの石せやく籠守ゆをば



秀吉の
 山越
 の道
 山越の道



突くも大膽更小聲り代口方よ
 者一く戦ひし持たざるも突おて
 刀を抜く鎧武者五落切て落し
 八人よ多き愛せ其身金銀あわら
 されバ救下のみ財叶ひかくく
 乱軍の中小立なる腹撞切刀を
 首小押あかくかき落しそぞ死
 しくりたる八目覚一くるる物
 惜むべき勇士之蜀の馬設ははて
 星野又八即
 福嶋田別が即ち主よむとて

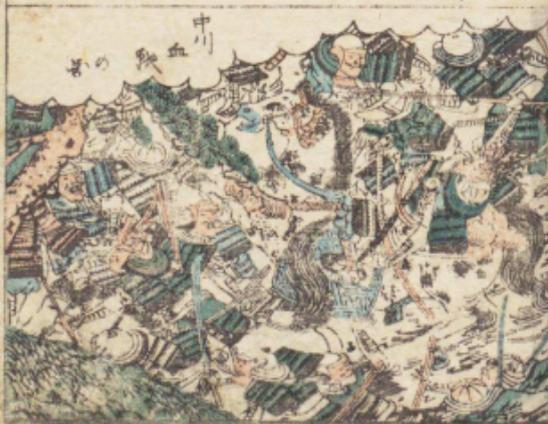
不敵の兵捕は見川の我は敵
 味方おしよありたる射漏竹布委
 血氣壯人の若老あまこハあこ敵を
 見捨るるもつとつぞれ只一人小鴨
 左半の元信は川中流を退付さん
 一我ひるるが元清を仲名未石弥
 太舟といふは福島と流そと母て
 将く交へ突合しといふそ福徳子
 敵をべき一流は突殺さる福嶋が
 即ち六七十騎れ来りく流く味方
 もあふれバ引退ちべしとて



引之ひきの廿六にじゅうろく正則ただのりもそ心こころなく廿四にじゅうし斗たう死した
 りりか今いま付つえ一ひと敵たてのそををいいかかるるこ
 を無念むねんなれと又また廿四にじゅうし元もとのもとももり
 見みをを廿六にじゅうろく一ひと町まち向むかひひの方かたにに南みなみ條ぢょう十じゅう町まちを
 勢いきほ二ふたををうう使つかひひうう正則ただのりわわと
 恐おそくくももままくく末すえ君きみままををううたた切きるる
 ううちち又また八はち分ぶんハハ眼まなこをを怒いかりり迫せまりり
 敵たてああららババ切き捨すれれとと批ひへへううをを殺ころすすひ
 ううやや思おもひひんん敵たて勢いきほ一ひと人ひともも出で合あふふ
 者ものななららりり一ひと人ひとババ主しゅ使しゆゆくくとと引ひ
 取とりり蜀しやくのの兵へい陣ぢんよよははと

中河瀬平清秀

和田伊賀守を討取うちとれりりと名なを
 を天下てんか小轟せうこう一ひと山さん修しゆ合あ戦せんのの砌せき
 先陣せんぢんとと一ひと番ばん小敵せうたてをを破やぶりり凱
 歌かをを揚あげげりり怒軍いかげんのの勝軍かちがへん
 とある秀吉柴田勝家と合
 戦の時秀吉を助け戦ヶ嶽の
 此苦このくるしみ小こをを殺ころすす佐久間盛政の大軍
 と苦戦くるせん一ひと勇ゆう威いをを殺ころすす討死うちしを
 通とほりりをを惜おしみみぬぬ老らう者もの蜀しやくのの麗れい
 統とはは諭ゆふ



木村又藏

加藤清正いそぎ流まかりし
附仁恵を感ト井上大九郎と
共小主後の衣釣を河婦川の
合戦のをろ磯野丹波守が後
陣より一人ゆく是を破り
石山本願寺と取合の志もた
根来の小密茶を討ち怪力
鬼神れとく一生教と案の
かく小付係とろ関羽お仕へ
周倉とも僧つべ

仙石伯耆守秀久

権き剛大剛の勇士ゆく太閤
くく小秘蔵もふ薩列お使し
義久が不札をいり其命は
速ひ私小軍をいり大よ敗
軍は秀吉その命をそむた
しを大ふいり後行を没収
も其は亦屢我功あふふよ
まわくふかつて聚樂寺小
宗連の衣盗緋石川をた馬を
生捕蜀の侍中馬良小比呂



石川
聚樂寺
衣釣

高山右近友祥

その先荒太抄津守が旗の下
うり村重亡びて後織田伝長

み随ひ山崎合戦の時秀吉不
弛かたう案内とて先陣と

て武勇は倫偽多し蜀呂

艾は擬ふ

大和太伯言秀長

未乃土に異種同母の身始ち

小市郎信もこれ合戦も兄

は隨身セほといつと入る

武功度ありて威名を輝け

物中永禄七年二月十一日

別所長治と三木は戦ひ八

百餘騎を討ち紀列は根葉

を斃り四五征伐は八所迄の

一のふれ城を屠り九列征伐

は八日向の諸城を陥し一五を

平均も紫野大徳寺ゆりく

信長公の葬式を執行ふのをた

一おんゆく此の地を行くを
功芳蜀の大傳許靖ふ嫌ふ



因云 上界

前田徳若院玄以燒番の次第
を奉書紙に記し奉るを
多不持分たの方れゆふ忌を
長谷川丹波古右又奉り
高声のヤ々々ハ燒番の順列を
讀上らる各次第をを乱
香又く御さべりといふ此時亦
回徳若院位もすまふ使わし
登を指介しより御上
とすふ又紫田勝家大まふ

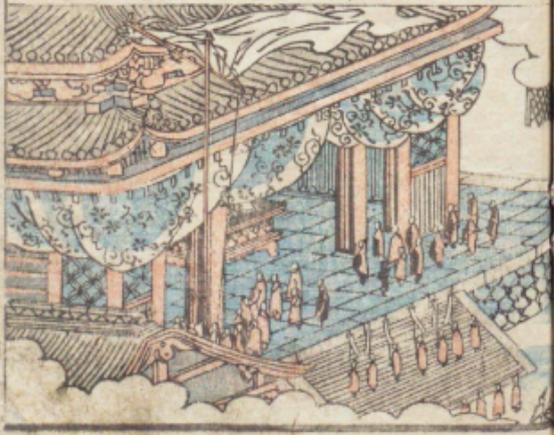


て亡君の吊合戦もて勲功あり
侍従信孝公もよく好まふこれ
る也一紫田修理進付添をも
と信孝公の膝を推し立て出
んと久小畠の長尾星彦も
大小のりたるハ佐孝公も
近相ひる申持信雄公こそ
故右大臣の二男もきりまは
一書の燒番お解く後改より
席を立せる人信雄公の
侍従も香るべしと中務お



座を立を流川一益管と
 押留り信炊公ハ後次男信孝
 公ハ三男ヲ在せしモ孝村日本
 を東彌分ち三年三國の後
 見申て是あれハ何と云何
 公逢會一申科孝徳久
 信雄信孝を誘ひく靈承不
 拜礼一既不建香の席小直
 香おふを毎もハ九の

方此帷幕の内より信雄信孝
 焼香幣く待も久入羽柴里位
 少将秀吉見と氣んと寺中
 大音信もつと氣を香色
 両公遠も附人も豊田源川一統
 又も此方此幕の傍り
 冠は黒き腕腕の袍を忘し
 王の平徳合の英命を頼知の太
 刀儀う小帯ひお赤衣故撫儀
 以三法師を抱きしを悠然
 とうて立更ハ加藤をせし



万夫不敵の勇士十二人肌を
 上うへ小真豆をこまめ腰こしに有ありつ
 袴はかまのそバはききななてて八方小眼を
 配はりまきまといいちち一ひと掴つかみましまし
 ぶぶぢぢひひままくく左ひだり右みぎをを圍かこひひもも憤いら
 すすれればば並なら居まるる諸國の大小ちがひ名な此
 形勢かたち小仰こおほ又また一ひと更さら小洞こほらをを知しり
 考かんがへへ息いきをを活いててぞぞ抱かかへへるる秀
 吉しゅきち兩眼らうがんくらくらとと見み脚あし見み不孝ふこうの
 信しん燈とう信しん孝こう不ふ孝こうの勝家しょうけ一益いちやく嗣
 君きみ三法さんぽう所ところ焼や香かう未なおおぬぬささるる



一靈前いんぜん小迫こしほつつたた非礼ひれいの仍なほ乃の尾
 ををおおろろくく扱ありりとと威い有ありりてて衣いに
 共ともよよそそのの信しん雄ゆう信しん孝こうととてて衣
 ととろろとと座ざをを退ひきき器き居いてて云いふ
 かか一ひと勝家しょうけををええんんとと怒いかまるまる
 髪かみ髻まげ道みち立た立た上ありり大おほいい座ざをを
 勵ありりてて衣いにに秀吉しゅきち兩らう人にん故ゆゑたた矢
 十じゅうの公こう三法さんぽう所ところ後ごの叔父しやくふとと小
 せせとと申まをすす信忠しんちゆうの所ところ焼や香かうか
 ららババ三法さんぽう所ところの先進せんじんとと申まをすす
 理ことわりありりとと申まをすす三法さんぽう所ところはは是こゝ右みぎ大おほ



の
 其
 二
 六

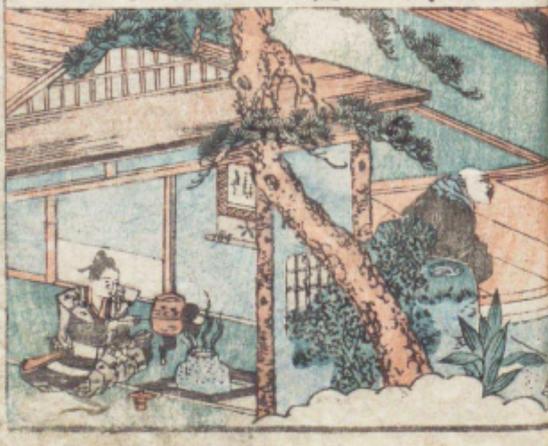
公の汗吊かゝるもや父元の靈あり
 へ公達の御あまさを孫の之能は
 殿何れ理有く支へらるや況や
 秀吉勢を中の身を以て礼礼を
 との失言何れ致へての程言あり
 そ其上不孝不忠なりとの言
 言上をおも不道人勝家が人
 八またら佐久間去番秀吉を
 知り已後のことしあふ類を折や
 と罵りあを勝家を後小扣へ
 佐久間面受勝気さして立ん

とすれば秀吉は尤も小並居る加
 老翁の勇士とも近き六四持人を
 柄小子を数目を配りて一軍の
 諸士お様の徳候もあ汗振て見
 合せたる秀吉御家をまつこと
 白眼之三法師無信長公の所家
 督小定りさい二位中納言小叙
 せられ天下の武将小侍りも
 然も小當神戸両家相候れ
 あま先君の世徳に傳の持家と
 五五五先んとしての姓者八非礼



あつて何ぞや信雄ハ勢ありて
 二万人の勢を督一京都の大變
 父兄此難ありせまひを以て
 ら農ひ忍み惟任がふ小安土の
 城もさうさにおもくと清洲集
 て序邊の争中ハ不孝とや
 いん取病とやん勢もつふ地
 なり又信孝ハ大坂ハ在陣して
 是も二万人京都迎き津屋
 されバ明智ヲ殺逆を以てバえ抱
 も取取も池上りて合戦せまふ

免秀が運感も思も惟信が紀
 一を以て掌し支も叶ふ
 しくとひりまや我上洛を侍
 將の大任とあお驚う山崎の戦
 敗なり孝も勇も智もれも
 匹夫勝家ハ織田の心算あつ
 吊合戦をまぐ心もあく後小
 日教えまじり光秀が首ふ
 大言を吐ぬるぞや実小武士
 志を各へあつるハ墨前少



焼香の次子勝上順小随い茶
多き先焼多き及たれり
抱き先焼多き及たれり

蒲生飛騨ち氏郷

右安左衛門賢秀ク子忠吉

織田信長小畠と合戦のとき

十才少く先登小進と甲斐を

けり明秀光秀及運のち父

賢秀とりの小信長の妻を助け

て日丹の善城貞秀吉大志の

後隨身して大隅出石の城を

小猛威をあし終小城を妻陪

を共余一代の如様我力塚小

尽く蜀の宴は將軍慶登

子掛く

九鬼大隅ち喜隆

そのま勢列小畠の若下信吉

随い戦功あり后未正小仕へ取

守大隅平佐城を電

脇及び及とりの小舟師をいそ

をを攻落をも朝鮮松伐のそり



舟軍ふねぐんなく高名たかねをとりその名
 求代もとよの獨ひとり巴あまの西にし天あま夫と符ふ心こころははを
 石田治部いしだのちぶ輔すけ三成さんせい
 五奉行ごぶぎやうの一個兒いっぺいご性しやう卒すり秀吉ひでゆき
 小給こたま仕つか一ひと佐吉さきちと樹たけ以もつ義童ぎどうを
 羅らをを當ありさせる功こうたりと
 りつもの大祿だいりくをたげり奸かん佞べい毒どく
 を懐なき太閼おん野の他た界かいのは驕きやう慢まん
 の心こころを記し謀及および企青せい野のを平
 小寇せうこうを眼一ひと臭名くさうなを求世よを不
 傳つたふ董卓たつは擬ふ



長束ながたば大だい谷や少せう補ほ心こころ家け
 古今こゝろ獨ひとり歩あ歩ほ智ち勇ゆうの侍也なりを
 かくかくとと風かぜれは發はするをさくく
 責せままババ必かならずず碎くだるるぬぬととはは
 珠たま小こ美み劫せつとと才さい秀しゆ主しゆ常じやう帝てい
 小兵せうべい糧りやうを軍用ぐんよう未なししのものを
 可よくよくよくよ五ごを仍の其一ひと個ご蜀しやく
 の護軍ごぐん将軍しやうぐん法はふ心こころととはは
 後藤ごとう又また兵衛べいゑ基もと次つぎ
 別所べつしょの旗はた下した後ご若わか將しやう監かん基もと圓ゝんが
 子幼こちやう少せうより黒田くろだ孝隆かうりゆうは仕つかへ



武勇技屋正堅陣決城とい
 ども破らるる朝輝在
 陣の時軍中此將を
 たり諸將虎狩を
 の大虎いで母里太兵衛
 すやふ危うりを一打小た
 甲斐守長政の代小いり不
 とあり白昼小園を退散し
 年々頼み仕へる小園方
 とある共軍師の功老
 蜀の代れ元師姜維小



16

子 九六

